

A-3.自分たちで作ろう(感覚・感性が育まれる梅干作り)

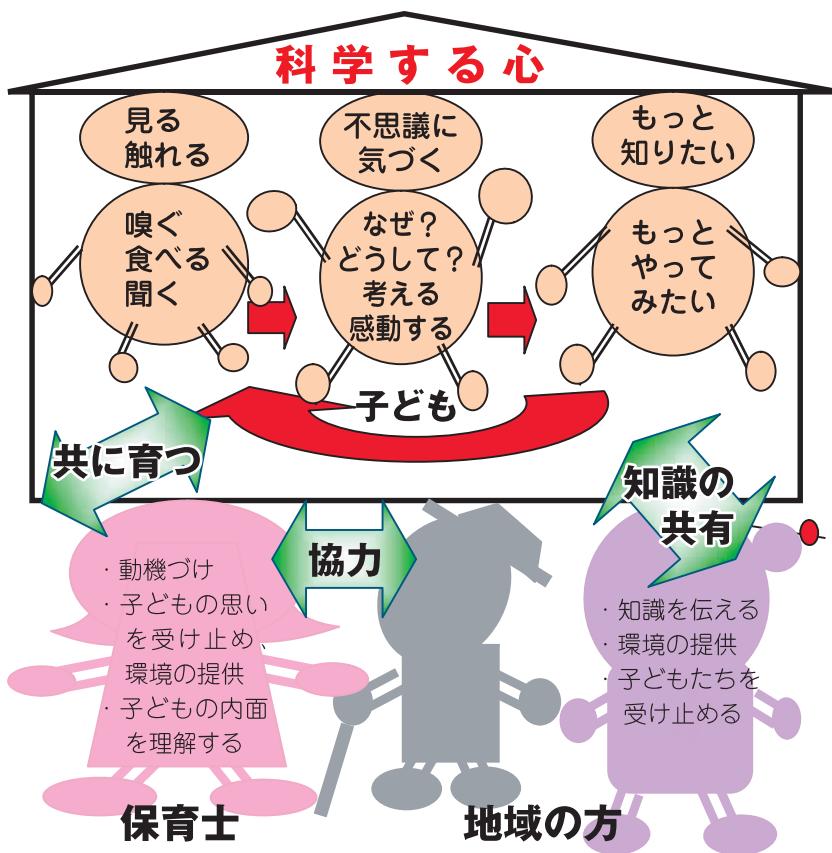
岡崎市矢作西保育園(愛知県岡崎市)

[5歳児]

矢作西保育園は、広大な畠が隣接しており、一年中を通して、いろいろな作物を収穫することができる。また、周りの環境は、田んぼ、竹林、小川、寺など豊かな自然に恵まれている。毎年、本物との直接体験を大切にして、子どもと保育者で旬の物を味わい、様々な感覚を使ってそのおいしさを体感する。この豊かな自然環境を通して自然の実りが自分たちを生かしているという思いを持ち、同じ食べ物でもおいしさや成長の違いに気づき、「なぜ」「どうして」という科学する心を保育者と共に育んでいきたい。

1 科学する心とは

科学する心は「なぜ? どうして?」から始まる。そして知りたいと心が動き、様々な感覚を研ぎ澄まして、自然と直接体験を繰り返す中で、皆で協力して調べたり、考えたりし、達成感・満足感を獲得する。そして慈愛・感動する子どもの心が豊かになっていくことだと考える。



- 植物の生長に伴う変化の過程に興味を持ち、やがて食物となる時、どんなものが食べられるのか考える。
- 人間が生きていくには食物がいかに大事であるか知る。
(「食物=生きる力」)
- 収穫物をどうしたらおいしく食べられるのか、作る工程では、なぜそうするのか考える。
- 食物（植物）の変化には、太陽や水、土、人の力が加わることが必要なことを知る（感じる）。
- 自然との共生の大切さや不思議さを感じながら、変化の面白さを体験する。
- 地域の方との交流を深め、自然と共に生きているんだという思いと喜びを感じる（味わう）。

2 実践事例

(1) 野草とのかかわり・菜種作り

身近にある自然を活かし子どもと保育者、地域の方が一体となり、自然に親しみ、自然の面白さや役割に気づき、そして自らの手で探し育て、食することで命の恩恵を知ることを目的として取り組んだ。

食べられる野草を探す	調理する	食べる	菜種取りをする
レンゲ・タンポポの茎も食べられるの? ドクダミは体の毒を出してくれるの? ユキノシタって何?	洗う 卵を割る てんぶらの粉を作る 油に入れる（泡の大きさ、音）	どの野草がおいしかった? タンポポは初めおいしくて、後から苦い ユキノシタは甘い	油って何? 菜の花が油になるの? 菜の花ってすごい 種をとる（振る、踏む） 種の感触を楽しむ 日に干すと温かい

いろいろな体験の中で、子どもたちが心を動かし、物事を敏感に捉えて「見る」「触れる」「嗅ぐ」「食べる」「聞く」などの感覚を使い、自然の命の恵みや大切さに気付いた。また、好奇心・探究心が深まり、「科学する心」を育てることにつながった。

(2) 様々な感覚・感性が育まれる梅干し作り！

設定した理由

菜種油作りを経験した後、子どもたちは“不思議さがし”をするようになった。木の不思議、虫の不思議、そして食べ物の不思議にも興味を深めるようになった。それを聞いた地域の方が、「梅の実摘みの経験をしてみないか」と声をかけてくれた。子どもたちに話をすると、「梅の実って何？」という話になった。梅の実を知らない子がほとんどである事に気づき、これはとても良い体験になると思い、梅の実をつかって、梅干し作りをすることにした。

保育者の思い

家庭でうめぼしをつくることはほとんどない。梅の実を摘む所からはじめられる梅干し作りは、子どもにとって自分たちで作り上げる喜びと共に、食べ物の大切さや、地域の方との触れ合い、もっとやってみたいという意欲を育て、科学する心を養う事になると考えた。また、保育士自身も初めての体験となり、子どもと共に学び、喜び、様々な感覚・感性を働かせて感じる楽しさを共有することとなった。

見る、触れる、収穫する

梅の実って緑なんだね。
梅の実ってつるつるしてる。
梅の木って、大きいね。
梅の木って、とげがあるんだね。
梅の実ってこのままじゃたべられないんだ。どうやってたべるの？



うめぼしを作ろう

地域の方の話を聞く

梅干し作りを教えてもらおう。
どうやって梅の実を赤くするんだろう。
何日も何日もおいしくなるように寝かせておくんだね。



自分たちで作ろう

おにぎりと私→



梅の実を洗ってみよう。塩で揉んでみよう。
しそを塩で揉んでみよう。→葉っぱがトゲトゲしているね。汁が出てきた。
紫色だ。どうして梅干の色と違うのかな？
梅干をつけた汁（梅酢）を入れると赤くなった。「不思議」「魔法の汁だね」匂いを嗅いでみよう。
どんな味かな？→すっぱい、おいしい、梅干の味だ。
梅が赤くなった。手も真っ赤！おいしそう。
干してみよう。（裏返す）→シワシワになった。少し色が変わった。
梅干おいしそう→おにぎりを作り、味わってみよう！



干したしそは食べられるの？→いいにおい。おいしそう。
しそふりかけを作ろう→おばあちゃんは棒ですってた。
くるくる回して細かくしてた。
やってみよう→ゆっくりまわそう。しっかり押さえよう。
本物のふりかけみたいだ→すごい！おいしそう！

考察

自分たちで時間と、手間と、愛情をかけた梅干しを食べられるという事で、どの子も目を輝かせていた。子どもたちの一人一人の表情や「大切な梅干し気をつけてね」と言う言葉が自然に出てきたことからも、梅干しを大切に思っている事がよく分かる。形は様々であったが、自分のおにぎりをどの子も嬉しそうに作り、食べることができ、子どもも主体で、様々な感覚を十分に使い、楽しめた。子どもたちの心に、自分でする楽しさ面白さが養われ、科学する心が芽生えてきているのを感じる。

ポイント

野草に興味をもって「見つけ、触れ、調理し、食べた」活動により、植物を加工して食物として楽しむ喜びを味わうと共に、様々な感覚・感性を働かせて自然の命の恵みを体験することができました。そうした体験を活かして、「梅の実を梅干にしよう」という思いが共通になって、みんなで取り組んだことがよく分かります。自分たちで意欲的に作りながら、「紫色が赤い梅干しの色になる」「シワシワになる」「すっぱくておいしい梅干になる」と、十分に様々な感覚を働かせて梅干になっていく実感を味わい、本物の梅干やふりかけになるという感動的な体験をし、「科学する心」が育まれています。